

シン・ポジウム「伝承が再生産する歴史——歴史の倫理性・政治性を問う」を振り返る

川田順造

「歴史と伝承」をテーマとする第一回大会での、シンポジウムの企画と実行を三浦会長から依頼され、私にとつても強い関心のある課題だったので、お引き受けした。私たちの学会が対象とする領域の根底にあるのは「伝承」であるが、それが歴史という、過去をいかに表象するかという人間の営みと関わるのは、現在に生きる人間が絶えず過去を想起し、語り直し、語り継ぐことによって「歴史」を再生産しつづける点にあるといえる。これは、歴史資料としての文字記録が、過去のある時点との固定された同時代性をもつこと、決定的に異なる点であろう。過去との同時代性がないから、口頭伝承、身体伝承の上に成り立つ伝承史は歴史研究が依拠すべき基盤を欠いていると見るのは、「歴史」の捉え方の悪しき狭隘化だ。

母体が複数の人間であることに集合性を見ることができる。その際の過去の想起のされ方は、個人にとっての過去の想起の、単なる総和ではない。そこでは、口承文芸の領域で取り上げられてきた世間話・噂話研究と共通する問題が、従来の文献記録中心の歴史研究に、新しい視野を拓くだろう。

通時的には、伝承が再生産する歴史とは、時代の変化のなかでの多数の発話者による「協話」、つまり、メッセージの受信者が同時に潜在的な発信者でもあるようなコミュニケーションの場での、複数の発信者の協同による一つのディスクールの紡ぎ出し——かつて私が座のディスクールの作られ方の一つとして、モノローグやダイアローグ、ポリローグに対して「シンローグ(協話)」と名付けたものの性格を呼びた、すべての発話者に共有された過去の表象としての、だが決して等質的ではなく、ヘテロな要素も呑み込んだ複合的ディスクールであると見ることができる。ここでもまた、歴史事象の一回性とその表象の多重性という、歴史研究にとっての基本的な問題が、極限的な形で提起される。

そして、いうまでもなく、これらの問題は、伝承される歴史の意味、その倫理性と政治性への問い合わせに、私たちを直面させる。

これらの問題群に異なる視角と素材で切り込むため、三人のパネラー（加藤千代氏、閔一敏氏、川田）が、それぞれの研究に基づく報告を行い、藤井貞和氏と小池淳一氏にコメントをお願いした。

加藤氏は「毛沢東伝説に見る口承の歴史認識」と題した報告で、毛沢東伝説が民間の口承のなかで、大蛇退治、農民起義など中国歴代の帝王伝説のモチーフを踏襲するようになったことを指摘する。また祖父や父の遺骨を風水でいう龍穴に埋葬すれば、子孫が帝王・宰相になるとする「眞龍地伝説」の要素も加わっており、伝説の形成にとっての陰陽師の役割、権力循環思想もそこに認められる。このような要素に彩られた民間の毛沢東伝説は、中華人民共和国政府によって、マルクス主義の用語で、公的に解釈され、流布されてきた毛沢東の事績が、人が先祖代々馴染んできた歴代帝王伝説の言説によつても、表象し直されうることを示している。

閔氏の「ユダヤという表象の力学——ドレフュス事件から——」は、

一九世紀末の国民国家形成期に、仏独間の帰属問題の争点となつた

アルザス地方出身のユダヤ人の仏軍将校、ドレフュスをめぐる有名なスパイ疑惑事件を取り上げる。ヨーロッパにおけるユダヤ人をめぐる根の深い集合的記憶は、この時代の政治的状況のなかで、フランスにおけるナショナリズムの興隆をはかる動きに利用されたといえるが、同時にドレフュスの冤罪を晴らそうとする作家ゾラなど知識人の政治的発言と、それを支えたジャーナリズムの世論形成の力

が、この事件を機に広く社会に認識されるようになった。

この場合伝承が果たした役割は、ユダヤ人という表象を、ヨーロッパの歴史のなかで形を変え、場を変えて繰り返し再生産してきたことであろう。毛沢東伝説では、政治権力者側が公的解釈として示す一回性＝革新性を、民衆の集合的記憶が権力循環のパターンに連れ戻そうとするが、ドレフュス事件では逆に、ユダヤ人将校のスパイ疑惑を、ユダヤ人をめぐる民衆の集合的記憶のパターンに取り込むことで、公に認めさせようとする政治的意図が、ジャーナリズムを通して政治的な場に出た知識人の弾劾という革新的出来事によつて挫かれるのだ。

「誰にとつての歴史か——当事者の視点・研究者の視点——」と題した川田の報告は、西アフリカのモシ王国で、王が即位三十三年目に建国伝説の始祖の地に還つて儀礼を行うという、実際に行われたことを誰も知らない「しきたり」を実行せざるをえない立場に置かれた王の建国伝説の解釈と、よそ者研究者として王の知らない参照点にも依拠して得た別の解釈の方が関連事象間の整合性がより大きいと見る川田の立場との違和を取り上げる。

王という当事者とよそ者観察者の視点の隔たりは、より高次の「間主觀性」に統合されうるのか、それぞれの歴史認識の倫理的意味をどう考えるかについて、川田は問題を提起したが、「間主觀性」への統合の可能性には、当面川田はきわめて悲観的である。この問題は、素朴实在論的歴史観が否定され、歴史＝物語論が有力となつた現在の歴史認識論のコンテキストで、現代史を書くことをめ

ぐつて、欧米でも「アウシュヴィッツの真実」をめぐつて)、日本でも(いわゆる「自虐史觀」批判をめぐつて)、なまなましく進行中のものだ。(川田報告の詳細は、川田『サバンナミステリー、眞実を知るのは王か人類学者か』N.T.T出版、一九九九年、に記されている)

二人のコメンテーターおよび会場の参加者から、伝承の「歴史性」、「作られる伝統」集合的パフォーマンスによって現在に甦る過去の記憶、等々をめぐつて、多様で活発な発言があつたが、発言の論旨が多岐にわたつたため、司会(川田)の不手際もあつて、論点を十分に整理して議論を進めることができなかつた。川田の個人的な呼びかけて来場していた、会員外の高橋悠治(作曲家、ピアニスト)、高橋睦郎(詩人)、佐々木幹郎(詩人)、山本ひろ子(日本思想史研究家)等、このテーマに関わりの深い論客も活発に発言したので、出された論点は豊饒であつたが、シンポジウムとして論議をしぼりこむことができなかつた。パネラーの報告の視角・素材が多様であり過ぎたことも一因で、それは企画・司会の責任であるが、しかし提起された問題群が、口承文芸研究から歴史研究はじめ広く人文社会科学への問いかけ、ないし貢献として、きわめてアクトチュアルな意味をもつことも確認されたと思う。今度のシンポジウムを一つの踏み台として、より問題をしぼった上で、今後の議論の展開を期したい。

(かわだ・じゅんぞう／広島市立大学)